

幼児の基本的動作としての「投げる」動作習得に向けた取り組み －新聞ボールを用いた実践から－

Efforts to Help Young Children Acquire “Throwing” as a Fundamental Movement:
From the Practice with Newspaper Balls

田 邊 圭 子*¹、坂 井 貴 子*²

要旨

本稿は、幼児の投動作習得に向けた取り組みについて、新聞ボールの実践から考えるものである。本実践から、子ども達が楽しみながら新聞ボールを「投げる」ことにより、新聞ボールだけでなくボールを投げる際の「腰の捻り」や「体重の移動」等、体の使い方に変化が生じることが示唆された。それは、子ども達の試行錯誤を可能にする子どもたち自身で作った新聞ボールの特性や自由度によるところが大きい。子ども達が創意工夫や試行錯誤を繰り返せるような活動により、子ども達が自ら「投げる」動作を習得していくことが確認された。

キーワード：投動作 (throw action)／新聞ボール (newspaper ball)／実践活動 (practical Activities)

I 研究の背景

ボールは、子ども達が大好きな遊具の一つである。しかし長年幼児の運動に携わる中で、ボールの動きに自分の動きのタイミングを合わせられず、自分で弾ませたボールを顔に当ててしまう子どもや、ボールの動きを目で追えず、自分で投げ上げたボールを頭に当ててしまう子ども達が少なくなっていると感じている。このような子ども達にとってボールは決して楽しめない遊具であり、ボールに対する恐怖心は「投げる」「捕る」「つく」等、ボールを用いた基本的動作の獲得を困難にしてしまう。

幼少年期に習得することが望ましい基本的動作は一般的に、移動系動作（走る、跳ぶなど）、操作系動作（投げる、蹴るなど）、平衡系動作（回る、浮くなど）に分類される¹⁾。しかし都市化が進み、生活が豊かで便利になる中、子どもの体力

・運動能力は、1985年（昭和60年）以降、低下傾向にある²⁾。また、運動する子どもと運動しない子どもの二極化傾向や体を思い通りに動かす能力の低下も指摘されており³⁾、筆者が会う「ボールが怖い」子ども達の存在は、今や特異なケースではなくなっている。

子ども達の基本的動作の習得状況を受けて日本学術会議は、「基本的な動きの習得がなければ、安全かつ効果的な運動遊びの実施の妨げとなり、体力の向上に必要な運動の強度や量も確保できず、子どもの体力がさらに低下すると予測される⁴⁾とし、「子どもの動きの形成は、もはや子どもの自然的発育・発達や自主的な活動に委ねられる域を出て、社会環境の再整備や学校等における教育の改善を通して保証されるべき危機的な状況に至っている⁵⁾と述べている。

運動の動きや技能の習得には適時性があり、「幼児期（1～5歳）から児童期前半（6～8歳）における運動発達は著しく、この時期に獲得する基礎的動作は生涯を通じて運動全般の基本となる」と言われており、基礎的運動技能の中でも代表的な走・跳・投は2～6・7歳にかけてかなり成熟

*¹ TANABE, Keiko

北陸学院大学 人間総合学部 子ども教育学科
保育内容・健康指導法、健康活動、身体表現

*² SAKAI, Takako

北陸学院第一幼稚園

した動きになることが報告されている⁶⁾。文部科学省⁷⁾は遊びの中で様々な基本的動作を習得していけるような幼児期の実践活動を求めており、遊びを中心とし、保育者が子どもと一緒に遊ぶ、保育施設が家庭や地域と一体となり、幼児期の運動発達特性に応じた取組を実施する重要性を述べている。基本的動作習得において、「遊び」を中心とした保育者と子ども達による活動が展開される幼稚園、保育所、認定こども園における取り組みは重要であると言えよう。

幼児期の未熟なボールを用いた基本動作（「投げる」「捕る」「つく」等）は、小学校低学年の体育「ボールゲーム」授業における、「ボールを思うように投げられない」、「ボールの落下点や捕り方がわからない」、「飛んでくるボールそのものが怖い」児童につながる。そのため、小学校の体育授業では、ボール運動経験の少ない子ども達が、自ら積極的に運動に取り組み、投球・捕球動作の経験を重ねられるように、ボールそのものへの恐怖を軽減させる実践が報告されている。新聞とレジ袋を使って作ったボールによる実践^{8)注1)}はその中の1つである。新聞を使うため、ボールへの恐怖を軽減させることや、1人1個マイボールを持つことで、運動経験を増やすことが報告されている。また、掴んで投げる、つまんで投げる、取っ手を持って投げる等様々な投げ方が可能になり活動が積極的になることも報告されている。しかし、小学校での授業実践は、新聞ボールを使った「ゲーム」が目的であり、新聞ボールを単に「投げる」だけの動作で終始することは、体育の授業として時間的にも内容的にも難しい。遊びを中心とした保育だからこそできる運動遊びとして保育の中に取り入れ、保育者と共に楽しみながらできる活動にできないかと考えた。そのためには、保育者が子どもたちと一緒に楽しく遊べるような具体的な内容と楽しく遊ぶことが幼児の基本的な運動動作習得にもつながるといふ事例を示す必要がある。そこで、研究者らが北陸学院第一幼稚園で実施している体育的遊び教室において、子どもたちの反応を見ながら実践を試みることにした。

北陸学院第一幼稚園の体育的遊び教室（以下、体育的遊び教室と記載）は、同園4～5歳の希望園児を対象とした保育外の運動遊び活動である。

子ども達が保育の延長の活動として参加できるように、同園教諭も指導を担当している。活動は、5月～7月、9月～11月に約20回北陸学院第一幼稚園ホールにおいて1週間に1回1時間実施している。1回の活動は、準備体操と基本の動きの活動約20～30分、本運動約30～40分からなる。

本研究では、体育的遊び教室の本運動で実施した新聞ボールを用いた「投げる」、「捕る」の活動の内、「投げる」動作習得に向けた実践を通して、子どもが楽しみながら幼児の基本的動作としての「投げる」動作が習得できるような取り組みについて考えることにした。

なお、本研究は北陸学院大学倫理審査委員会の承認を得て実施された。

Ⅱ 新聞ボールを用いた「投げる」動作習得に向けた実践

1. 研究の目的

子ども達が楽しみながら幼児の基本的動作としての「投げる」動作が習得できるような取り組みについて、新聞ボールを用いた実践から考える。

2. 方法

(1) 対象

体育的遊び教室参加園児31名：4歳児18名（男児8名、女児10名）、5歳児13名（男児7名、女児6名）

(2) 実施期間

実施期間：2021年6月2日～7月21日、
2021年9月22日

実施回数：6月（3回）～7月（2回）、9月（1回）の計6回

(3) 場所

北陸学院第一幼稚園ホール

(4) 記録の方法と分析

スマートフォンとiPadを使用し、全6回の幼児の新聞ボールを使った活動の様子を撮影した。研究者2名は活動を指導しているため、撮影は2名の研究協力者に依頼した。

各回の活動後に、指導者、撮影者で子どもたちの活動に関する意見交換をした。また、交わされた意見を基に、指導者は撮影された映像を見て実践を振り返り、次の活動内容を検討し実施した。

3. 結果と考察

(1) 新聞ボールづくり (第1回活動)

新聞ボールは新聞紙1枚でまず芯を作る。その芯を新聞で1枚ずつ包み込み、ガムテープで止める。その後レジ袋に入れ、持ち手部分を縛り、再度ガムテープで止めて作成する。大人にとって簡単な工程も子ども達には難しい。新聞を何枚丸めるかは、事前に子ども達に作ってもらい、子どもの手で扱える大きさや「投げる」動作がしやすい大きさを考え、新聞の全形3枚で作ることにした。

新聞ボールは、1つ1つの工程を説明しながら子ども達と一緒に作成した。説明は、子ども達が作り終えたのを見計らって次の工程に移るようにし、常に子ども達の様子を見ながら進めた。なお、説明に向けて、以下のような留意点を考えた。

- ・子どもが自分でつくれるようなわかりやすい説明をする。
- ・1枚目(芯)をできるだけ小さく丸くするために力を入れて丸くすることを伝える。そのことで、2枚目の新聞に包んで再度丸くするときの動作がスムーズになると考えた。
- ・子ども達が自分なりに丸めた新聞を一旦、ガムテープで留めさせることにより、丸くなったことを確認できると考えた。
- ・形を気にする子どものことを考え、新聞紙だけで作成した時点でいびつであっても、ビニール袋に入れて、再度ガムテープで止めれば大丈夫なことを伝える。

新聞ボールを一旦ガムテープで止める際、球体の新聞ボールにガムテープを貼ることが難しい子ども達には指導者(研究者)が手伝った。ただし、手伝う場合は子どもに新聞ボールのどこからどこまでガムテープを貼りたいのか、子ども自身の考えを聞いた後、子どもの指示通りにガムテープを貼った。ガムテープを自分で止められる子どもには2~3人に1個ガムテープを渡し、順番に使いながら自分達で貼るように伝えた(図1)。

ガムテープを貼る際、他の子どもが貼る様子をよく見て、どのように貼ろうか考えている様子が窺われた。中には、「(ガムテープを)バツにした方が止めやすいよ」と自分のアイデアを伝える様子も見られた。出来上がった各々のボールに、

油性マジックで名前を書き、全活動を自作の新聞ボールで行えるようにした。



図1 ガムテープ貼り

子ども達が自分で作った新聞ボールは綺麗な球形のボールにはならない。しかし、子ども達は自分の新聞ボールが出来上がるやいなや、大喜びしながら次々とボールを高く投げ上げたり、遠くに投げたりし始めた。飛んでくるボールのことや他の子ども達のこと等、周りを気にせず遊ぶ子ども達の姿は、通常のボール遊びでは考えられない。それは、新聞ボールを恐れず伸び伸びと遊ぶ姿であった。

(2) 新聞ボール投げ (第2回~第6回活動)

ホールの床に2本のラインを引き(ラインとラインの間の距離は約3.5m)、自分の新聞ボールを持った子ども達を一方のライン上に並ばせた。ホールの広さの関係により、全員が一列に並ぶことはできないため、クラス毎に男女を分け、クラス毎男女別に並ばせて投げさせた。そして子ども達に、他方のラインに届くくらい遠くに新聞ボールを投げるように指示をした。一斉に投げさせ、投げ終わったらすぐに自分の新聞ボールを拾い、反対側のラインから同様に投げる。この動作を3往復1セットとし、第2回から第6回の全ての活動において、子どもたちのその日の状態を見ながら1~2セット行った(図2)。

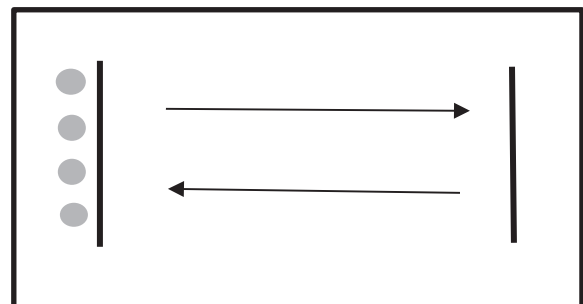


図2 新聞ボール投げ

子ども達が作った新聞ボールは、柔らかすぎず、程よい硬さがある。それは、新聞を使って作られていることだけでなく、4～5歳の子ども達自身の手によって作られていることによるところが大きい。子ども達は、新聞ボールの形を自由に変えて使っており、中には脇で挟んで円盤状にする子や、手で潰して楕円形にする子どももいた。

新聞ボールはレジ袋の上から中身の新聞をぎゅっと握ることが可能なため、容易に片手で持つ(握る)ことができる。子ども達はすぐに片手で投げるようになり、回を重ねる毎に遠くに飛ばせるようになった。また、投げる際に新聞を包んでいるレジ袋と新聞との隙間やガムテープでできた隙間を持ったり、指を引っ掛けて投げたり(図3-1)、使っているうちに破れてきたレジ袋の端(図3-2)やレジ袋の持ち手の結び目、レジ袋の持ち手部分(図3-3)を使って投げる等、各自で工夫を凝らし次々と様々な投げ方を試す姿が見られた。中には袋の持ち手を2つ合わせて振り回すように投げる投げ方を考案する子どもがおり、それを見て真似をする様子も見受けられた。

新聞を用い、子ども達が自らの手で作ったボールを用いることで、小学校の実践からボールに対する恐怖心が減ることが報告されている⁹⁾。それは本研究でも同様であり、手製の新聞ボールへの愛着と身体にあたって痛くない新聞ボールそのものの特性によるところが大きい。しかし、子ども達が新聞ボールによる活動を楽しみながら行なった要因はそれだけではない。4～5歳児の子ども達が作った新聞ボールは綺麗な球形ではないが程よい柔らかさがあるため、片手ですぐに持って投げられる。また、新聞ボールの形を自由に変

えたり、持ち方や投げ方を工夫したりするなど、思い思いの創意工夫を繰り返し、自分に適した投げ方を編み出すことを可能にする。この新聞ボールの自由度の高さが子ども達の「投げる」動作の試行錯誤を容易にし、楽しさにつながる事が本実践による子ども達の様子から窺われた。

(3) フープに向かって投げる(第3回活動)

第2回活動で子ども達はすぐに新聞ボールを片手で投げるようになった。しかし、ボールを遠くに投げようとすればするほど地面に強く叩きつけてしまう様子が何人も見受けられた。第2回活動後指導者間で話し合い、投げる方向を見て投げる経験が少ないからではないかと考えた。そこで第3回の活動の際、投げる目標をフープで示し、子ども達にはフープを目掛けて投げるよう指示した(図4)。最初は玉入れのように飛び上がってフープに通そうとしていたが、跳び上がらなくても通せることがわかると、フープの方を見て投げるようになり、地面に叩きつけて投げることはすぐになくなった。



図4 フープに向かって投げる



図3 子ども達の新新聞ボール

新聞ボールは子ども達の手にフィットするため、子ども達はすぐに片手で投げられる。目標を示すなど、活動を少し工夫するだけで、容易に遠くに飛ばせることが本活動で示された。

(4) ボール投げ(第2回、第6回活動)

子ども達の「投げる」動作の変化を確認するために、実際に新聞ボール投げを開始した第2回(第1回は新聞ボール作りのため、「投げる」活動の初回)と活動の最終回である第6回に、活動の一環としてボール投げを行った。ボール投げのボールは、幼稚園の幼児用ゴムボール(0号球)を使用した。なお、活動最終回の実践では、新聞ボール投げとボール投げの動作の違いも確認するため、ボール投げと同じ要領で新聞ボール投げも実施した。

ボール投げ及び新聞ボール投げ共に、前述(図2)のラインを使用し、クラス毎に実施した。子ども達をラインの一方に縦2列に並ばせ、各列1名ずつ2名がラインに並び、1人2回続けて投げることを説明し、いつも通り指導者(研究者)の合図で投げることに加え、子ども達には「向こうの線の方に向かって、できるだけ遠くに投げるんだよ」と声を掛けた。

新聞ボールを子ども達はすぐに片手で持ち、回を重ねるごとに様々な投げ方を工夫し、遠くに投げられるようになった。しかし、第2回と、第6回に行ったボール投げは、ほとんどの子ども達が両手投げであり、一見したところ新聞ボールの活動はボール投げには反映されていないような印象を受けた。しかし、活動終了後撮影された動画を確認したところ、子ども達の投げ方に違いが見受けられた。そこで、子ども達の「投げる」動作の変化について、動画を用いて調べることにした。

Ⅲ 新聞ボールを用いた実践による子ども達の「投げる」動作の変化

1. 目的

新聞ボール投げの実践と「投げる」動作習得との関連について確認することを通して、子ども達が楽しみながら幼児の基本的動作としての「投げる」動作を習得できるような取り組みについて考えることを目的とする。

2. 方法

Ⅱの実践で活動の一環として実施した、初回(第2回活動)のボール投げ(以下、初回ボール投げと記載)と最終回(第6回活動)に行ったボール投げ(以下、最終回ボール投げと記載)及び新聞ボール投げ(以下、最終回新聞ボール投げと記載)について、撮影した動画を用いて各々の「投げる」動作を確認した。

(1) 対象

体育的遊び教室参加園児31名の内、初回ボール投げ、最終回ボール投げ、最終回新聞ボール投げ全てに参加した24名の撮影動画のみを対象とした。

対象園児は以下の通りである。

4歳児16名(男児8名、女児8名)

5歳児8名(男児5名、女児3名)

(2) 実施日

初回ボール投げ：2021年6月16日

最終回ボール投げ・最終回新聞ボール投げ

：2021年9月22日

(3) 場所

北陸学院第一幼稚園ホール

(4) 記録の方法と分析

スマートフォンとiPadを使用し撮影した。研究者2名は活動を指導しているため、撮影は2名の研究協力者に依頼した。全第6回の活動が終了した後、研究者2名は各自撮影された初回のボール投げと最終回のボール投げと新聞ボール投げの動画を視聴した。視聴する際、中村ら¹⁰⁾による「投動作」の5段階の動作パターン図を参考に独自に作成した(表1)の「投げる」動作のチェック表(以下チェック表と記載)を用い、チェック表の大項目に着目し、小項目の内容が子ども達1人1人の「投げる」動作に見られるかどうか各自で記録した。

その後、研究者2名は各々の記録を持ち寄り、異なる場合は共に動画を見て、チェック表の小項目に該当する内容が見られるかどうか確認した。そして、各小項目のチェック数を算出し、初回ボール投げ、最終回ボール投げ、最終回新聞ボール投げ各々について、*t*検定を行った。有意水準は5%未満とした。

表1 「投げる」動作のチェック表

大項目	小項目	内容
ボール（新聞ボール）の持ち方	両手	ボールを両手で持っている
	片手	ボールを片手で持っている
投球時の手の位置（投げ方）	頭上・後	投球開始時手の位置が頭の上もしくは後ろ
	肩	投球開始時手の位置が肩
	胸	投球開始時手の位置が胸
	下	投球開始時手の位置が腰よりも下
	横	投球開始時手の位置が体側
投球時の足の位置	並行	投球時地面に足が左右並行に着いている
	前後	投球時地面に足が前後に着いている
	片足	投球時左右どちらか一方の足が地面から離れている
その他（体の使い方）	上体反らし	上体を後ろに反らしてその反動で投げている
	おじぎ	立位から上体を前に倒して投げる
	腰の捻り	投球時腰の捻りを使って投げている
	体重の移動	投球時両足を着けた状態で後脚から前脚に体重を移動して投げている
	足の踏み込み	投球時一方の足を踏み込んで投げている

3. 結果と考察

研究者2名が各々「投げる」動作のチェック表に記した数を算出しグラフ化したところ、投げる動作に違いが見られた。4歳児の結果は(図5)、5歳児の結果は(図6)の通りである。以下、チェック表の大項目は『』、小項目は「」で記載する。

『ボール（新聞ボール）の持ち方』に有意な差が認められることから、対象者である4歳児、5歳児の多くがボールを両手で投げ、新聞ボールを片手で投げていることが確認できる。

『投球時の手の位置（投げ方）』において、5歳児には有意な差は認められなかった。しかし、4歳児では、初回ボール投げで見られた「頭上・後」、「下」が、最終回ボール投げと最終回新聞ボール投げで有意に減少し、初回ボール投げではほとんど見られなかった「肩」、「横」が最終回ボール投げと、最終回新聞ボール投げの両方で有意に増加している。しかし、4歳児の『投球時の手の位置（投げ方）』におけるこのような有意な差は最終回ボール投げと最終回新聞ボール投げの間には認められないことから、新聞ボール投げの実践活動により習得した「投げる」動作が最終回ボール投げにも反映されている可能性が考えられる。

『投球時の足の位置』について、4歳児では有意な差が認められなかったが、5歳児では、「並行」、「前後」、「片足」の全ての項目において有意

な差が認められた。5歳児の初回ボール投げで見られた「並行」の割合が最終回ボール投げ、最終回新聞ボール投げでは有意に減少し、初回ボール投げで全く見られなかった「片足」の割合が最終回ボール投げ、最終回新聞ボール投げで共に有意に増えている。初回ボール投げの「片足」は、5歳児だけでなく4歳児においても見られなかったが、4歳児は最終回ボール投げ、最終回新聞ボール投げにおいても見られなかった。また、5歳児の「片足」は最終回新聞ボール投げと最終回ボール投げで有意な差が認められ、「前後」は最終回ボール投げには全く見られず、最終回新聞ボール投げとの間に有意な差が認められた。

『その他（体の使い方）』では、4歳児、5歳児共に、「腰の捻り」「体重の移動」「足の踏み込み」で有意な差が認められ、4歳児では「おじぎ」にも有意な差が認められた。4歳児、5歳児の「腰の捻り」、「体重の移動」、5歳児の「足の踏み込み」における有意な差は、初回ボール投げと最終回ボール投げ、初回ボール投げと最終回新聞ボール投げの両方に認められ、最終回ボール投げと最終回新聞ボール投げの間には有意な差が認められなかった。また、初回ボール投げで見られた「おじぎ」は、最終回ボール投げと最終回新聞ボール投げで減少し、4歳児では最終回新聞ボール投げとの間に有意な差が認められた。

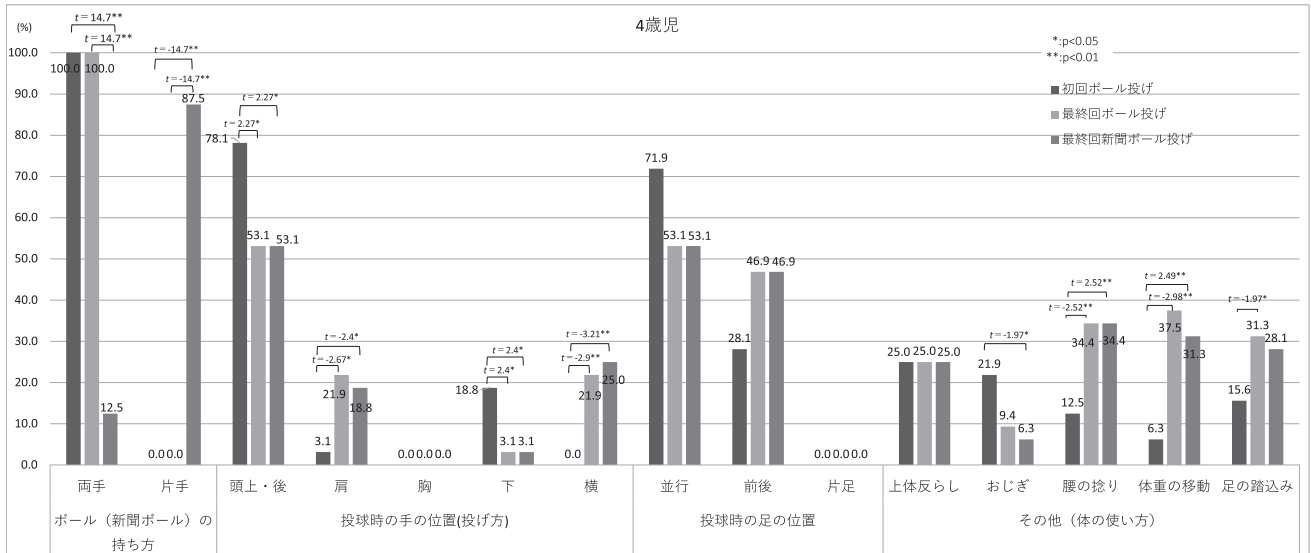


図5 4歳児のボール投げと新聞ボール投げ

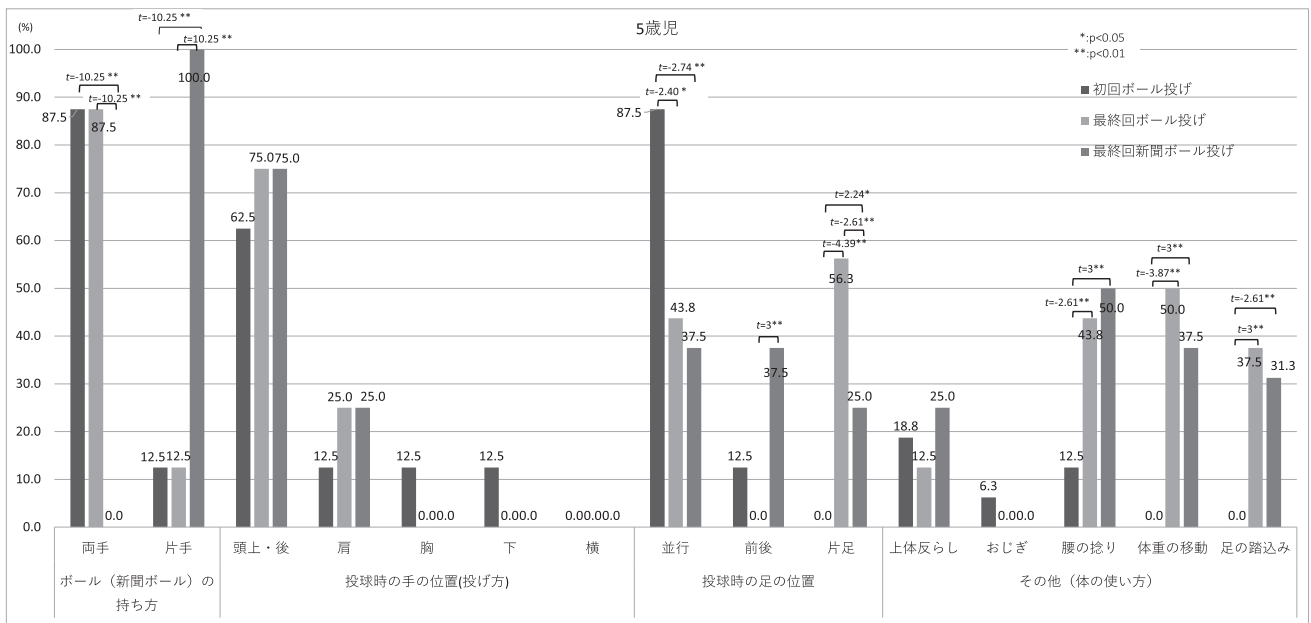


図6 5歳児のボール投げと新聞ボール投げ

以上の結果、4歳児、5歳児において、有意な差が認められた項目の内、4歳児、5歳児の『ボール (新聞ボール) の持ち方』、4歳児の『その他 (体の使い方)』の「おじぎ」、「足の踏込み」、5歳児の『投球時の足の位置』の「前後」、「片足」以外は全て、初回ボール投げと最終回ボール投げ、初回ボール投げと最終回新聞ボール投げの両方で有意な差が認められ、最終回ボール投げと最終回新聞ボール投げには有意な差が認められなかった。この結果から、新聞ボールを用いた実践により、初回ボール投げで見られた「投げる」動作から、新聞ボール投げだけでなくボール投げにも変化を

もたらした可能性が考えられる。

4歳児、5歳児共に『その他 (体の使い方)』の「腰の捻り」と「体重の移動」において、初回ボール投げに比べ、最終回ボール投げと最終回新聞ボール投げの割合が有意に増えている。また、4歳児では、『投球時の手の位置 (投げ方)』で、5歳児では『投球時の足の位置』及び『その他 (体の使い方)』の「足の踏み込み」で、初回ボール投げに比べ最終回のボール投げと最終回新聞ボール投げの割合が有意に増えている項目が見られる。新聞ボール投げの実践により、子ども達は「腰の捻り」や「体重の移動」を使った投げ方を

習得し、加えて4歳児は様々な手の位置からの投げ方を、5歳児は投球時の足の位置や、足の踏み込みによる投げ方を習得している可能性が示唆された。

IV まとめ

新聞ボール投げの活動は、床にひいた2本の片方のラインからもう片方のラインに向かって新聞ボールを投げて捨てる動作を繰り返す、至ってシンプルな運動である。1人当たり多い日で6往復、少ない日で3往復繰り返すだけである。しかし子ども達は飽きることなく生き生きと楽しそうに新聞ボールを投げていた。

新聞ボールはあたって痛くないため、子ども達はボールを怖がることなく、楽しみながら活動できる。また、子ども達が作った新聞ボールは、綺麗な球体にはならず個性的な形をしているが、硬すぎず柔らかすぎず、子ども達の手にフィットするため、子ども達はすぐに片手で投げられるようになり、目標を示すなど、活動を少し工夫するだけで、容易に遠くに飛ばすことができるようになった。また、活動が進むと子ども達は思い思いに新聞ボールの形を変え、様々な持ち方を工夫しながら投げるようになった。この新聞ボールの自由度の高さが子ども達に「投げる」活動を楽しくさせたことが考えられる。

新聞ボールを片手で容易に投げる姿に比べ、最終回に実施したボール投げは両手で投げており、一見したところ初回に実施したボール投げと子ども達の投げ方に変化がないような印象を受けた。しかし、初回ボール投げ、最終回ボール投げ、最終回新聞ボール投げについて、撮影した動画をチェック表を用いて確認し、結果を算出したところ、初回ボール投げに比べ、最終回ボール投げと最終回新聞ボール投げの両方において、子ども達は「腰の捻り」や「体重の移動」を使った投げ方をしていることが確認された。また、4歳児では様々な手の位置からの投げ方に、5歳児では投球時の足の位置や、足の踏み込みによる投げ方に変化が見られ、新聞ボールを用いた実践により、新聞ボールで習得した遠くに投げるための体の使い方がボール投げにおいても生かされている可能性が示唆された。

本実践において、子ども達は「投げる」動作が上手になりたいとは考えていない。単に「どうしたら(新聞ボールやボールを)遠くに飛ばせるか」だけである。そのために、新聞ボールを様々な形に変化させ、持ち方や投げ方を工夫して投げる。しかし、それが結果として子ども達の「投げる」動作の変化につながったことが考えられる。このように、幼児の基本的動作としての「投げる」動作習得に向けた取り組みには、子ども達が楽しみながら、試行錯誤を繰り返せるような活動と、それを認め、見守ることにより、子ども達が自ら「投げる」動作を習得していくことが本実践から確認された。

V 今後の課題

本研究は、幼児の基本的動作としての「投げる」動作習得に向けた取り組みについて、新聞ボールを用いた実践から考えることが目的であった。そのため、本実践による変化を、初回ボール投げ、最終回ボール投げ、最終回新聞ボール投げにより確認した。子ども達が通常の活動との違いを敏感に感じ取り、緊張しないように通常の活動の一環として実施したため、子ども達は普段と変わることなく伸び伸びと楽しそうに投げていた。しかし、子ども達の「投げる」動作の変化に焦点を当てて調査したわけではないため、今後より厳密な調査研究が必要であり、その際、幼児の特性を踏まえた調査研究の手法については更に検討する必要がある。今後の課題としたい。

付記

本研究は、日本保育学会第75回大会において発表した「幼児の投げる動作獲得に向けた取り組み－新聞ボールによる実践報告－」に加筆修正したものである。

謝辞

本研究に協力してくださった、北陸学院第一幼稚園の体育的遊び教室の子ども達と保護者の皆様並びに教職員の皆様、そして動画を撮影してくださった瀬戸美江、瀧浩輔両氏に心より感謝申し上げます。皆様の本研究へのご理解とご協力がなければ本研究は実現しませんでした。深謝申し上げます。

ます。

〈引用・参考文献〉

- 1) 中村和彦、幼児の動作発達と評価、幼児期運動指針実践ガイド、2014年、pp. 105-120.
- 2) 内閣府、“平成30年度版 子ども若者白書”、p. 38、
https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h30honpen/pdf/b1_02_01_03.pdf (参照2022-12-07)
- 3) 同上
- 4) 日本学術会議、健康・生活科学委員会健康・スポーツ科学分科会、『子どもの動きの健全な育成を目指して～基本的動作が危ない～』、2017年、p. 5
- 5) 同上
- 6) 日本学術会議 健康・生活科学委員会健康・スポーツ科学分科会、『子どもの動きの健全な育成を目指して～基本的動作が危ない～』、2017年、p. 5
- 7) 文部科学省、“体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書”、pp. 29-30.
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/youjiki/index.htm
(参照2022-12-07)
- 8) 森本淳、日野克博、「レジボール」で豊富なボール操作の経験を、体育科教育(2)、2017年、pp. 43-45.
- 注1) 金沢市内の小学校には、新聞ボールを使ったサッカーの授業を実践している教諭がいる。筆者はその教諭の1人である北野孝一氏の授業実践で使われている新聞ボールを参考にした。同氏は、授業で使用している新聞ボールを、日本サッカー協会、『サッカー指導の教科書』、東洋館出版社、2017年、p. 41に記載している。
- 9) 前掲8)
- 10) 中村和彦、武長理栄、川路昌寛、川添公仁、篠原俊明、山本敏之、山縣然太郎、宮丸凱史、観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達、発育発達研究、第51号、2011年、pp. 1-18.

